

50 周年記念座談会

- I 歴史を語る
- II 未来を語る —その1—
- III 未来を語る —その2—

I 歴史を語る

2023 年 12 月 10 日 新橋ルノワール会議室にて

(参加者) 井上千鶴・織田泰児 F・高倉和郎・多久薫・津田のぼる・中川むつみ・平山延子・武藤順子
司会=田所一紘 / 記録=財前みつこ

田所 皆様、お寒いところ集まっていたいただき有難うございます。不肖ながら司会を務めさせていただきます。さて、早速ですが自己紹介を兼ねて何回展から東京展に参加されたかをお教え下さい。

平山 第 1 回展から出品しました。特にツテがあったわけじゃないですけど、出せました。会場はとても自由な雰囲気でしたね。

武藤 私は第 2 回から絵本の部門で出品しました。絵本の部屋を立ち上げたのが田島征三さん。128 名でスタートしました。その後すぐに田島さんから「あとは任せました。」とバトンを渡されました。

織田 私も 2 回展からです。当初、団体展には出さない気持ちでいましたが、第一回東京展を見て、あまりの自由さに感激して出展を決めました。クモ男が上に吊り下がっていたり、等身大の人形があったり、踊りがあったりと、かなり奔放でした。

井上 第 3 回から出品して、一回休んだものの第 5 回展からは毎年欠かさず絵画を出品しています。

多久 私は第 4 回展からです。初回の際はまだ女子美の学生で、東京展開催は学校で噂にはなっていました。

津田 記録から調べると私は第 5 回展から、ということになります。今とは違って平面絵画としてずっと出していました。

中川 私は第 7 回からです。東京造形大学の学生時代に見に行き、先輩方も出していました。1980 年に石井義雄先生という造形大の先生の授業の一貫で観に行き、それは映画【天平の葦】の背景画をスライドショーにしたものでした。出品二回目で東京展賞を頂戴したものの、増井和弘先生から「これは立体にした方が面白いんじゃないか。」とアドバイスされ、立体作品を中心に作るようになりました。

高倉 私は第 9 回展からです。仕事の関係から海外生活も長く、初期の東京展はあまり見たことがありません。しかし出品した当初の東京展は企画にも力を入れ、レベルも高かったし、バラエティーにも富んでいました。



中川むつみ氏

田所 皆様、有難うございます。では、テーマ I である、【美術の祭典・東

京展 第 I 回展】を実見した方に質問です。実際ご覧になっていかがでしたか？

〈初回の東京展〉

織田 さっきも言いましたが、やはり自由奔放、何でもアリ！ 他の団体では考えられないようなことをやっていました。その熱気も凄かったですね。ただ、平面絵画に関しては、私自身少し関心が薄かったのか、印象にさほど残っていません。

武藤 私は第二回展を見えています。全身カーキ色の服に身を包んだ中村正義さんと法政大学学長だった中村哲さんが一緒に会場歩いているのを目撃しました。それはまぶたに焼き付いています。中村正義さんはもう晩年で、やせ細っていました。

多久 私は実見はしていませんが、ギリヤーク尼ヶ崎さんが美大生界隈ではアイドルのような人気で、それこそ「ギリヤークさんが上野で踊るらしいよ！」と情報が駆け巡っていました。

武藤 深尾庄介さんは、「日展の反対勢力には苦勞した。」と言っていました。同時開催を主張する東京展側とおおいに揉めていたようです。都庁に座り込みにも行ったそうです。

織田 東京展の鼻息はすごくて、在野の主だった団体に「中心メンバーを二人ずつ出品させなさい。」と、要請までしていたとのこと。のちに新制作協会で活躍した張替眞宏さんも初回の東京展には出したと言っていましたからね。

田所 初回の東京展は東京都美術館の改装オープンに合わせて、日展と同時開催を実現しました。団体展示室が日展。企画展示室を東京展、と割り振られました。日展と美術館側は計算高く、日程にこだわる中村正義さん側に連絡せず、会期にさほど拘りの無い評論家の針生一郎さんを美術館に呼び出して、次年度の日程、ズラした日程を飲み込ませたようです。そこで元々組織体としては脆弱な東京展の内部亀裂がより一層深まりました。二年目はどうしても会期が前倒しになり、針生一郎グループも袂を分かって東京展を去って行きます。



高倉和郎氏

初回に関する資料は 2015 年に川崎の岡本太郎美術館で開催されての【岡本太郎と中村正義「東京展」】カタログや、jaic 会報 15・16 特別合併号【ドキュメント・画家中村正義と「東京展」－「第 1 回東京展」開催のドラマ】笹木繁男編著 があり、その他初回の会報や目録な

ども経緯が記されています。なので、ここでは次のテーマに行かせて下さい。

テーマⅡとしてはまず、賞の在り方について伺いたと思います。

〈東京展と賞〉

津田 私ら東京展賞をもらった時は第23回でしたが、賞状もなく、おまけに連絡も来ないで、懇親会にも出なかったから、あとから「おまえ、何で表彰式に来なかったんだい？」と言われる始末でした。

武藤 賞が設置されたのは第6回からです。展示が終わって田代光さんを中心に幹部と思しき人たちが5～6人で決めていったような感じです。特にそういった役割と決まっていたわけではありません。他の人たちは後ろからぞろぞろ歩いてただ承認する、といった流れでした。でも、賞に関してはいろいろ言われますが、あって良かったと思っています。何故なら絵本の部屋の人たちは賞をもらおうと翌年物凄くがんばってレベルが上がるからです。最初は絵本の部屋では「賞はいりません。」と自分たちから宣言していたのですが、2回目の7回展からもらうようになりました。

多久 田代氏グループ、自由美術一派、新制作一派、抽象絵画一派、イラストの人たち、写真部門、そして絵本や企画などがあって、それぞれ順繰りに賞をもらっているのかなと思っていました。私は中枢にいたわけではないので、賞の位置づけや意味合いは分かっていませんでしたが。

平山 いや、ハッキリとした割り振りは無かったと思います。

中川 ベテラン作家よりも若い人が取っていた。実力作家がまだ取っていないのにも関わらず、若い人が優先的に賞をもらっていましたね。少数の幹部クラスの人が決めていましたが、若手を伸ばそうとしていました。

高倉 東京展にはレベルの高い作家や優秀な作品もたくさんあって、賞をもらっている作品は会場であまり目立っていませんでした。つまり賞はそんなに重要では無かったと思います。

田所 賞を置きたくない団体もあつたりします。そもそも作家が作家を審査することに異議を唱える人も多くいます。そのような中で、今後賞を継続すべきか、やめるべきか、どちらとお考えですか？



井上千鶴氏

(挙手をお願いします) ああ、皆さんやはり賞はあったほうが良いと言う考えですね。



中川 しかし昨今の傾向として、賞選考でトラブルになったりもしています。諸悪の根源として賞があるなら、もう無くしても構わないかもしれません。

高倉 でも、昔と違い今の時代は、賞はあった方がいいですよ。

武藤 私もそう思います。

田所 僭越ながら発言させていただきますが、賞を与えることは作家同士に序列を作ることに繋がってしまいます。創立当初の理念とは離れる可能性が高いです。でも、賞は作家を励まし、育てますよね。会場で作品の下に『何々賞』と書かれている短冊はとてもパワーがあり、どうしても観客はそこで判断しがちです。賞という肩書に引っ張られてしまいます。東京展は研究会としての性格よりも発表会だと思うので、お客さんには純粋に作品と対峙してもらいたいです。東京展賞は最高賞ですが、それが東京展のベクトルを示すものではないと思います。東京展の理念は、全ての作品がベクトルであり、それぞれの作品を同じスタート地点から見してほしい。なので、受賞の短冊はやめて、廊下に貼っておくくらいがちょうど良いと個人的には思います。見る人に『賞は二の次三の次なんだよ』とメッセージしたいですね。

田所 では、会員制に関して質問させていただきます。会員制度は第5回から設置されました。他の団体は、何年もかかってやっと会員になれる、という付加価値があります。東京展では、あまりそれはありません。そのあたりいかがですか？



平山延子氏

〈会員制度について〉

武藤 会員制にして会費を取らないとやっていけません。それはまず、会計の都合から来るものでした。

織田 有吉佐和子の旦那さんと居酒屋チェーン【北の国から】を作った神彰(じんあきら)さんは東京展に多大な寄付をしたと聞いています。

田所 そうですね。先般インタビューさせていただいた

此木三紅大さんによれば、東京展発足に当たって、羽黒洞の木村東介氏が1000万円もの大金を投じたとも言います。初期の東京展はそうした寄付や私費で賄われていた面があって、反面それが不透明な経営にも映って批判もされていたようです。

武藤 田代光さんは会費制になる前の1回展から4回展まで、毎年5万円を絵本の部屋に寄付していましたが、そうした会計報告などは一切ありませんでした。

多久 確か4回展頃から推薦状が必要になったと記憶しています。

田所 東京展は当初、と言うか、今でもアンデパンダン展として認識されているフシがありますが、少なくとも中村正義氏の意向ではなかったようです。アンパンは針生一派の考えでした。だから東京展の会員制度は何も東京展精神に反するものではないと考えています。さらに東京展の会員は“ならせてあげる”ものではなく、どちらかと言うと“なっていたくもの”です。そこに上下関係は無く、より東京展を中から支えて行こうと思った同志がお金を出して東京展を構築していく、そんな会です。今後も多くの会員さんが生まれて欲しいですね。

さて、次は皆さん、これまでの東京展で一番印象に残った企画展は何ですか？お一人につき、一つだけ、絞ってお答え下さい。

〈企画について〉

武藤 第3回展の【漫画集団作品展】と【コンピューター・アート】ですね。とっても新鮮でした。特に漫画集団では、会場ですぐ小島功さんが横たわった女性像を描いて、それを中心に当時大活躍していた手塚治虫さんや横山隆一さん、やなせたかしさんにサトウサンペイさん、そして富永一朗さんらがその場で即興で漫画の絵を描いていました。圧巻でしたね。

井上 私はセダンタイプの車が直接美術館に搬入され、それに漫画家たちが絵を描いたイベントがとても印象深いです。今では考えられませんね。ガソリンを抜いたり、あんな大きなものを会場に運ぶことも大変だったようです。

中川 1995年は阪神淡路



織田泰児 F 氏



田所一紘氏

大震災がありました。そこで被災されたのが吉見敏治さん。自由美術の画家でもあった吉見さんは家が焼けてしまって絵も描けない状況だったにも関わらず、大きな紙に、地面に這いつくばるようにして描いた大作が何メートルにも渡って壁面を埋めている有様にとにかく感動しました。どんなに悪い状況でも気持ちさえあれば絵を描けるんだ、表現できるんだ、と勉強になりました。

津田 以前はけっこう海外の招待展をやっていました。『ソ連亡命作家展』、『大韓民国今日の美術展』、『ポーランド現代版画展』、『レニングラードの画家達、今。展』などです。彼らの作品は異質で、今まで見たこともないような表現でとても刺激を受けました。

織田 私もソ連亡命作家展はすごいと思ったな。それとオランダ作家の展示も面白かった。何せ枠なしの作品が大量に掛かってるんだから！ 一個だけ、と言われたけれどもVOCA展もインパクトがあったね。自分のアイデアで実現した企画だけでも朝日新聞や日経新聞にも取り上げられて盛り上がりを見せた。

平山 第5回展（1979年）の【飛翻化蝶展】も素晴らしかったですね。これは青森八戸青南病院の芸術療法における20年間の成果として展示されたものでした。校庭にチョークで描かれた沢山の蝶々。写真による展示でしたが、「こんな自由な表現もあるのか！」と驚きました。素焼きの土器なんかもあって、それも魅力的でした。手でぎゅっと握ったりしたままの形とかね。

高倉 私は第8回展の【江戸小紋の世界】（小宮康孝）を推したいですね。江戸時代からの着物の型紙や実際の反物布、ふくさなどが展示されていました。モダンなデザインであり、決して古く見えません。民芸からも離れています。ほぼモノクロ、白黒のような世界で引き込まれました。まさに【日本の着物マインド】を感じましたね。

多久 わりと新しめですが、アニメやコミックの世界がやってきて新鮮でした。今のコミックアートの前フリとして企画された【インターネットと現代の絵師たち展】です。単純に上手いなど思ったし、作者やファンもたくさん集まって、そこだけ異質な空間になっていた、というか……。そういう、従来と違ったものを許容する東京展の懐の深さもいいですね。

田所 皆さんの記憶に深く刻まれている企画展示を伺っていると、まさに東京展は初回からずっと情熱という炎を絶やさないで、生き生きと歴史を紡いで来たんだな、と嬉しく思います。さて最後にお聞きしたいのは、【残して欲しい東京展の理



武藤順子氏

念】です。「ここは特に重要だから今後の若手にも理解してもらって継承して欲しいな。」と考えることをお一人ずつお願い致します。

〈継承すべき東京展精神〉

武藤 今まで通りの理念でしっかりやっていただきたく思います。最近出品している人にまで、充分伝わっていない気がしますので。

井上 美術団体の場合特に、絵画・彫刻、のようにジャンル分けがハッキリしています。東京展はそれを超えて、【表現そのもの】を重視します。幅広い表現形態を尊重するのが東京展であり、懐が深いと思っています。今後もいろいろな表現を取り込んで行きたいですね。

中川 私もそう思います。展示ジャンルが幅広いです。それと私の作品は東京展じゃなかったら、同じような形で生き延びて来なかったかもしれません。平面から立体に転身出来たのも東京展だったからです。仮に他の団体だったら、ジャンルが違えばまたゼロからスタートしないといけません。あと、他の団体は偉い先生の価値観を超えることがなかなか出来ませんが、東京展は自分の恩師を超えていけます。その努力の方向を大事にしたいですね。

津田 ジャンルにこだわらない。表現のスタイルにこだわらない。立体でも平面でも、本人が本気でやりたいものを優先させる。そうした表現の根本を分かってもらった上で、リラックスして制作してもらいたいですね。



津田のぼる氏

織田 作家が作家を審査するのはおかしいと思う。

例えばマグネットアートの高木絹子さん。彼女は有力団体の展覧会で、審査の前にはじかれた。「マグネットで形が変わってしまう造形なんて、作品とは言えない。」などといった理屈からです。しかし高木さんがその姿勢を貫いていくうちに、その団体でも折れて「出していいよ。」となった。いい加減なものです。ある老舗団体の委員長と事務局長とタクシーの中で話したことがあった。彼らは「若い人がなかなか出してくれない。」と言うので、私は「東京展はコミックアートでたくさんの若手が出していますよ。」と返したら、露骨に嫌な顔をしていました。【何でも出していい精神】を今後とも貫いて欲しい。

平山 久田弘さんが言っていました。「パブリックアートをやる人、世界に打って出る人、彼らはみんな、反対の意見にも耳を傾け自分の鏡とする。」まさにその通りだと思います。独りよがりではやはり駄目で、謙虚な姿勢も大事ですね。

高倉 私は2つのことを考えています。1つ目は、【ヒエラルキーの否定】。芸術から権力や差別を無くしたい。2つ目は【作品における多様性の尊重】。まさに東京展の姿勢です。古いものでも新しいものでも、本気の表現ならば全部取り込んで行きましょう。

多久 昔、某団体展に120号を出して落選したら会員の方に「あんなに大きいものを出しちゃダメだよ」とアドバイスされました。翌年に別の団体展でも落選したのですが、その時も「大きな作品だったから落選した。」と言われました。返って来た絵の裏を見ると○印の上に×印がついていました。東京展ではそんなことは一切ありませんし、1点ずつの場も広く展示されます。本当に出したい作品を、ちゃんと出せる場が東京展です。



多久薫氏

そしてお客さん目線においても【作品をキチンと見せる場所】であり、それを出品者に提供する姿勢が東京展にあります。

中川 あともう一つ付け加えさせて下さい。それは【人権】です。それは東京展の50年間で一本筋が通っています。ソ連亡命作家も、ポーランドもバングラデシュも軍事政権下の韓国作家も、当時貧しかったり、自由な表現が認められていなかった国々のアーティストに発表の場を提供して来たのです。それは国内作家に対しても然りです。形骸化しがちな普遍的価値観である【人権】を、あらためて再認識させる東京展の存在価値を、未来においても引き継いでもらいたいと思います。

田所 非常に素晴らしいコメントをたくさんいただきました。もっと汲めども尽きぬエピソードを伺いたいのですがそろそろ時間が来ました。今回は貴重なお話を有難うございました。

II 未来を語る—その 1—

2023 年 12 月 17 日 新宿ルノワール会議室にて
高齢化する公募団体展にあって、東京展はどのように舵取り
をして行ったら良いか？賞の在り方や企画の在り方などが語
られます。

(参加者) 財前みつこ・塩沢かれん・塚原克孝・山下晃伸
司会=田所一紘

〈初出品の頃〉

田所 皆様、お寒いところ集まっていたいただき有難うござ
います。さて、早速ですが自己紹介を兼ねてどのような
経緯から東京展に参加されたかをお教え下さい。

財前 私は立体作品なのですが、2004 年の第 30 回展か
ら出品しています。大学時代の同級生と原宿でグルー
プ展を開いていて、そこで青柳芳夫さん・ナツエさん夫妻
にスカウトされました。

塚原 2019 年からなのですが、台風で会期短縮となつた
り、コロナでつぶれたり、と毎年出している実感に乏し
いのも事実ですね。水彩画の個展を銀座奥野ビル『一兎
庵ギャラリー』で開催していて、そこで隣の『銀座ワン』
という画廊オーナーの織田さんと山下さんと知り合うこ
とが出来て出品するようになりました。

塩沢 2017 年 43 回展からです。普段は油彩を描いてい
るのですが、その時は 30 号くらいの大きさの半立体作
品を出しました。大学 1 年の頃から織田さんや山下さん
から誘われていました。

山下 そうそう、塩沢さんの作品は堂々第 1 室にあって、
とても印象に残っています。私は 2015 年初出品で、以
前から東京展のことは聞いていたものの実際出すのに 10
年かかっています。まだ大学生だったということもあり
ますね。東京工芸大学の同級生に織田さんの息子である
藤井くんがいて、その関係で奥野ビルの銀座ワンで個展
もやりました。写真表現って、個展で大作出しても、それ
っきりで、大きな空間で発表することに興味を覚えるよ
うになりました。博士課程を終わって 2 年くらいしてから
東京展に出すようになりました。

田所 有難うございます。では、最初に東京展を見た時
の感想を教えてください。

財前 初めて東京展を見て
思ったのは、“なんて自由
な会なんだろう！”という
ことです。それこそ“何で
も OK！！”といった雰囲気
で、私にはそれが有り難
かったです。

塚原 私はそんなにいろ
いろな団体展を見てきたわけ
ではありませんが、“広い
な・デカイな・自由だな”



田所一紘氏



とと思いました。そこにある種の“ゆるさ”もあって、のび
のびとしていました。エネルギーも感じたし、とても楽
しそうに感じました。

塩沢 私も他の団体はあまり見ていません。ただ、他の
団体の絵画はサイズ規定があったりするのに、東京展は
サイズもジャンルも自由だな、と思いました。絵本の部
屋もあり多ジャンルで楽しい展覧会でした。

山下 思ったよりも会場が広がったですね。最初の部屋
の作品の大きさにまず圧倒されました。写真の団体だと、
最大で 50 号くらいです。それも三段掛け、四段掛け、と
かになって 5 枚出品して 1 枚だけ選ばれました、みたい
な……。東京展における写真部門の在り方が最初分か
らなかったのですが、徐々に飲み込めました。

塚原 そうね、展示の良さは感じたね。段がけはない。
一点一点作品が良く見えるように飾ってある。

塩沢 一点で見せるだけじゃなく、壁を作品化して、複
数の絵を構成して展示してあったり、見せ方の面白さも
とても印象に残ってます。

山下 一般出品の時は 1 万円のライン、つまり 100 号 2
枚で 1 万円の出品料で出していました。会員になって大
きなディスプレイになっていきました。

財前 そう言えば、立体の部屋で、今井伸治さんのドデ
カイ作品にドキッとしました。真っ黒い木の作品ですが、
素晴らしかったですね。

田所 最初に東京展に接した時は、それぞれではありま
すが、誰しものが新鮮な感動を覚えるようです。さて、次
の議題ですが、【賞選考】です。毎年選考の仕方を変えて
いるので、会員さんたちはなかなか付いて来れないかな、
と思うのですが、いかがでしょうか？

〈賞選考について〉

財前 田所さんは『東京展はアンデパンダン展ではない。』
と言っていますが、最初期の針生一郎氏が第 1 回展のパ
ンフレットで書いてしまっているのですね。

田所 そうなんです。最初から話が分裂してしまってい
ます。中村正義の話の中にはアンデパンダンという言葉
はありません。正義は、作家審査制にこだわってしま
ったからね。

財前 確かに賞をもらって作家は伸びる、という実感はあります。でも、ここ数年は受賞者数が多いと感じます。賞をあげすぎではないでしょうか？昔は”該当者なし”という年もけっこうありました。上を目指せるような賞の在り方にしたいと思います。

塩沢 該当者なし・・・。図録巻末を確認すると確かにそういう年、ありますね。賞に人数の枠組みって無いんですか？

財前 ありませんね。その時その時の票数をもとに、運営委員会で検討して決めています。

塚原 該当者なし、はいいいけど、無制限に賞をあげるのはどうかな・・・。

山下 私は受賞記念展の仕事をしています。最近は受賞者が多い傾向にあります。だけど受賞した作家がみんなこの展覧会に参加するか、といったらそうでもなくて、例えば遠隔地に住んでいる人の場合辞退したり、その逆に遠くからでも出してくれる人もいます。また、本展で賞を取れば、もうそれでよし、とする人もいて、モチベーションは様々だな、と思います。



塚原克孝氏

塩沢 オーディエンス賞はどうでしょう？実際観客はどう思ってるの？というリアクションが欲しいところです。

塚原 僕もオーディエンス賞に賛成！ たえ組織票であった場合もそれは観客動員につながるよね。

塩沢 東京展賞は最近二日目、三日目に発表されます。なので、そこに至るまでノミネート賞を掲示するも良いと思います。

塚原 ああ、賞候補として貼り紙する感じとかね。

財前 ただ、東京展賞の発表がずれ込むのは会員投票にしようと思えば変えた二年前からであり、そこで賞候補を事前に決めておくわけではないのです。残念ながら・・・。

山下 団体によってはスポンサー賞、というか副賞を後付けで決めたりします。より良い作品にそれをつけるのです。あと、グルグルハウス賞があるのなら、銀座ワン賞もあっていいと思います。それは若手、というか東京展に出し始めた人、新人を励ます意味があっていいと思います。つまり比較的ベテランが受賞するグルグルハウス賞との棲み分けを作るのです。

田所 それはいいアイデアですね。ぜひ委員会で提案して下さい。

塚原 実際選考に関わって来て、賞を決めるのも一面的じゃないんだな、と学びました。功労的側面、期待の側

面などです。しかし賞に作家は良い意味でも悪い意味でも影響を受けます。「この作風で評価されたんだから、私はこの路線で行こう。」となってしまうたりする。それは怖いところでもあります。賞をあげる側は責任が伴いますね。賞は作家に対するメッセージなのですから・・・。

山下 写真は毎年20名前後の出品者数で推移しています。なかなか会員になってくれる人がいなかったり、いろいろな理由でやめちゃう人とかいて、もったいない気がします。賞をあげることで彼らのモチベーションをアップしたいな、と最近思っています。でも、今年は写真から受賞者は出ていないんですよね。

田所 どうしても運営委員に絵画が多いので、絵画が賞の栄に浴する確率が高くなってしまいますね。写真に限らずその他部門でもなかなか賞にこぎ着けません。それは本当に残念なことだと思っています。

山下 コミックがここ2年、金銀銅と、WEB賞をやっていますね。それと同じように写真もなったら良いかもしれません。

財前 私はONE東京展であって欲しいので、あまり各部門が分かれて別々のものになるのは賛成出来ません。部門で独立した賞はどうですかね・・・。

田所 なかなか難しいところです。ただ、賞という日の目を見ない、良い作品作りをしている人も多いので、何とかしたいですね。それは功労賞とかではなく、公正に評価してあげたいということです。

塚原 話は少し変わりますが、例えば東京展賞を取ると次年度に10m与えられます。でもその副賞を欲しいがために東京展賞を目指す、あるいは運動する、というのはどうかな、と思います。もっと賞は純粋であって良い。

塩沢 審査員賞というのがあってもいいのではないのでしょうか。賞の選ばれ方は委員でない人には不透明でわかりにくいです。賞をもらった作家は、”どこをどのように評価されたのか？”知りたいところです。

田所 ちょっと今のわかりにくいです。審査員として外部の、例えば評論家を呼んで来るとかですか？他の団体ではやっていますよね。

塩沢 いえ、そうではありません。あくまで、作品に対するコメントが欲しいのです。

塚原 コンクールなんかでは、審査員の選評がカタログに掲載されたりするよね。

山下 投票時に自分の投票した作品全てにコメントを書く、というのはどうでしょう？ただ一言「印象深い」でもいいのです。誰かが特別に書いたものでなくていい。コメントの集約がその人に届けば、それは励みになるし、ホー



財前みつこ氏

ムページでそれらを発表してもいいですね。

田所 なるほど、良いアイデアがたくさん出たと思います。では次に企画展についてお話を伺いたく思います。

〈東京展独自の企画展について〉

塚原 私は藤井勉展が印象深いです。生涯無所属だった作家が東京展に何のゆかりも無いのに顕彰される。それは素敵なことですね。今回山下さんがやってくれた「#Save Myanmar」写真展にも繋がって来ますが、東京展にはそうした社会的役割がある。

山下 東京展に初出品した時でしたか、横前裕子さんの会員企画展がありました。外見は優しそうでかわいらしい“おばあちゃん”に見えたのですが、作品は鬼が大きく描かれていたり、そもそも作品が巨大だったりして、そのギャップに驚きました。あと、中村正義顕彰展は2回連続で開催しましたが、私も実際中村正義の美術館に行き作業を手伝いましたので、非常に印象に残っています。

財前 会員企画展は私自身今年やらせていただきました。モチベーションも上がったし、今までの自分を振り返る意味でも良かったです。それこそ“魂燃える！”“みたいな。あと、私が出し始めた当初、2004年の【鴨下晁湖】も良かったですね。“こういう作品も展示されるんだ。” 感覚的に良いな、と思いました。

塩沢 海外の作家を紹介したりしないんですか？

田所 昔は毎年のようにやっていました。ソ連亡命作家展しかり、ポーランド、レニングラード、インド、大韓民国、バングラデシュ、などなどです。どちらかと言えば、国自体に自由さが無かったり、多少貧しかったりして、自由にアーティストが発表出来ないのを助ける、発表の場を提供してあげる、といったスタンスで行われていました。今後も機会があればやりたいですね。

山下 昨年はウクライナチャリティー展をやりました。それはウクライナの作家に出してもらったわけではありませんが、困った海外の人々を助けようという精神。今年私がオーガナイズした「#Save Myanmar 平和への願い」写真展は少し違う意味合いですが、流れとしては東京展らしい企画だと自負しております。あと、EYESでも中村恵美さんは私が推薦したのですが、日本写真家協会に所属しています。今回のミャンマー関係の写真家さんたち3名のうち2名も同協会所属ですが、その関係者が大挙して見に来てくれましたし、今後に協力関係を持ってそう嬉しく思っています。

田所 山下さんの立案から実施まで、本当に見事でした。では、今後考えられる企画案で良いアイデアはないですか？

財前 やはり東京展と全く関係ないところからピックアップするのがいいと思う。例えば他団体作家でもOKだし、他の世界が垣間見えるようなセレクトを期待しま

す。

塚原 東京展 EYES はそうした意味で良かったと思う。現代美術もあったし、ウイングが広く上質でもあった。

田所 私がそもそも計画したのですが、確かに銀座界限で優れた作家を連れて来ました、作品は良かったです、刺激的でした、でも、当初は推薦委員が10名くらいいて、もっと委員みんなでセレクトする企画でした。そして結果的に招待された作家が東京展に一般出品で出し始めるとか、画廊さんが東京展に作家を紹介してくれたりとか、そういう今後の東京展につながることも念頭にあったのですが、まずはコロナで見回り委員システムが崩れ、さらに出品作家が一回こっきりで終わってしまっているような現状ではあるので、大変反省しているところです。ただ、まだ終わったわけではなく、来年は最終章として会員投票上位者による二回目の展示があり、そこでグランプリを決める流れも残っています。少しでも意義あるものにして参りたいと思います。



山下晃伸氏

塩沢 招待出品枠というものの自体はあって良いと思います。EYESが個人対象なら、グループを対象に招待するのも面白いのではないのでしょうか。グループでギャラリーを使って展開しているアーティスト集団を知っています。最近はそういうタイプも多いですね。

田所 なかなか面白いアイデアですね。

財前 私はそれこそ、とのむら茂一さんの作業所での創作活動をそのまま東京展に持って来たらいいと思う。彼はボランティアでそういうことをやっていて、とても意味があることだと思うし、先日の座談会で平山さんも、青森の芸術療法の展示が良かったとおっしゃっていましたからね。あと、今回私自身も小さく試してみましたが、出展者によるコラボも面白いですね。



塩沢かれん氏

山下 プラネットナインという私達のグループ展でけっこうやっています。最初は石塚亨さんがアナログレコードに他の作家の絵を刻んで作品化したのが始まりで、その後石井正樹さんの恐竜の立体作品を私が撮影することもしました。

田所 話を伺っていると、それは企画展というよりも自発的なものかもしれませんね。企画としてなら、昔セダ

ンタイプの自動車に漫画家集団が即興で漫画を描いたことがありましたが、インパクトを求めるならお祭的にまたやりたいと思います。きっと良いアイデアは思いつくことでしょう。

では最後に、今後、未来の東京展についてどうなって行ったらいいか、そうしたヴィジョンを語って下さい。

〈東京展、今後の展望〉

塚原 自由・自由と言いつつも、実は現代美術と呼べるものがあまりありません。新しい表現、メディアアートとか、インスタレーションとか、もっとあっていい。EYESにはそれがあって、私は好ましかったです。招待会員とか、招待制もあっていいんじゃないかな。

山下 展示空間をもっとシャッフルしてもいいと思います。絵画の部屋、立体の部屋、写真の部屋、と分かれてなくてもいいと思うのです。せっかくならもっと東京展らしくなったらいい。

塩沢 私は大学ではインスタレーション科にいました。本当に枠組みを超えた自由な表現が多くて、でも彼らが大学の外でどのように展開していったらいいか？今ひとつ見えませんでした。その受け皿として東京展が機能してもいいですね。そして最新のテクノロジーを駆使した作品とか、ヴァーチャルリアリティーであったり、アニメーションであったり、いろいろ呼びたいです。

田所 夢は広がりますね。そうしたことを実現するのは、ただ『東京展は何でも受け入れますよ。来て下さい。』と言っているだけじゃあ、作家は来てくれません。誰かが動いてスカウトする必要があります。そして継続的にオーガナイズしていく必要も。なかなか大変な仕事になりますね。

塩沢 まずは企画展として立ち上げて招待して実現していく、というのはどうでしょう？実際どういう展示になるのか実験して、その方向が認知されたあとで、一般出品を募集するやり方ですね。

田所 なるほど、私が立ち上げた【コミックアート部門】も最初の2年間は【インターネットと現代の絵師たち展】という企画展示から始めて部門化したのでした。

塚原 私も美大でメディアアートを教えている先生を知っています。声をかけたら実現する可能性が高いと思います。

田所 まずは、学生さんより先生を訪ねて行った方がいいかもしれませんね。

塩沢 美大の卒展にスカウトに行ったり、美大の映像科やアニメーション科の先生を訪ねたりするといいですね。

山下 簡単にデジタル作品を集める方法としては、大型モニターにスライドショーで映写していくやり方があります。今の作家はデジタルのままで満足して、それをプリントまで持っていない人も多いです。その窓口、受け皿として、まずは気楽にスライドショーをやるのです。

一枚につき、出品料＝数千円もらう、とかですね。写真もそうですが、コミックアートも裾野が広がると思いますよ。実際大きな容量で作っていながら大画面で見てない、埋もれがちな作品はたくさんあります。それを4Kのモニターで映し出すのです！

田所 モニターが大きければ大きいだけ迫力がありますね！ 夢は広がりますねえ。自宅では絶対に無いサイズのモニター映写ならとっても意味があると思うし、出品者も自分の作品をそこで見てみたくなるものでしょう。私も応募したいです。

山下 作家スカウトに関してですが、例えばグループ活動だけしているような作家集団もいます。そしてそのためのギャラリーもあつたりします。そこに乗り込んで東京展に出してもらおうのもいいでしょう。彼らだって、狭い観衆で閉じたままではいたくないはずだし、何年も続けていけば、最初見に行った人も次第に足が遠のきます。

田所 さすが皆さん活躍されている方ばかりなので、ポンポンと素晴らしいアイデアが浮かぶのですね。私もお話を聞いていてワクワクして来ました。

さて、時間も限られていて、もうわずかです。最後に一言ずつお願い致します。

塩沢 未来の東京展は【若手の登竜門】になるといいと思います。皆に認知され、東京展に出すことで一段上がるみたいなイメージを醸成して行きたいと思います。

塚原 【良い意味でのアンデパンダン感】かな。それは継続していきたい。

山下 【発表の場はいくつかあって、東京展も出す意義がある。各作家がいろいろな場を持つことの重要性】を認知してもらいたいです。あと、今の運営委員はあと10年したら皆さん80歳を超えるような状況になります。どうしても若い出品者、会員、委員が必要となって来ます。そうした若手を誘ってくるのも、私の役割かな、と思います。

田所 嬉しいこと言ってくれますね。同人組織はどうしても自分さえ良ければいい、といったマインドでは持ちません。誰かが自分を越えたところで働く必要があります。それは1人では無理で、何人もいた方がいい。ただ、それは単なる自己犠牲ではなく、自分に返ってくる行為です。結果的に自分が成長出来るし、そうした人間関係を構築していくのもアートなんだと私は常々思っています。

財前 山下さん、あまり自分を追い込まないでいいですよ。無理しないで下さいね。東京展はみんながノビノビと発表出来る開かれた場であって欲しい。音が欲しいなら音があってもいいし、ひろーい意味で芸術を体現して行きましょう！

田所 今日は皆さんから実り多いお話を伺うことが出来ました。感謝致します。希望を持って邁進して参りましょう！

Ⅲ 未来を語る—その 2—

2024 年 1 月 21 日 渋谷勤労福祉会館にて

高齢化する公募団体展にあって、東京展はどのように舵取りをして行ったら良いか？賞の在り方や絵本の部屋の存在意義なども語られます。

(参加者) 加賀美裕子・明輪優作・田代りえ子・石塚亨

司会=田所一紘

〈初出品の頃〉

田所 皆様、お忙しいところ集まっていたいただき有難うございます。さて、早速ですが自己紹介を兼ねてどのような経緯から東京展に参加されたかを教えて下さい。

加賀美 私は 1988 年初出品です。1986 年、練馬区の製本講座を受講しました。講座終了後、『練馬手作り本の会』を立ち上げ、月一回、武藤順子先生の指導を受けました。以来、私個人の作品やグループの共同作品を出品しています。当時、文部省が「親が子供に手作りの絵本を作しましょう」という活動を奨励していたのです。

明輪 私が東京展を知ったのはかなり早く、地元の絵画教室に来て一緒に描いていた井上千鶴さんに聞いていました。それこそ 40～50 年前のことになります。絵を本格的に発表したくなったので、いろいろ探しましたが、東京展はまず東京で展覧会を開催するし、私はそんなに大作志向でもないの、上野の美術館が改装中の時に、他の場所でやっていた東京展が 30 号制限なのもあって、出品しました。

田所 京橋のギャラリーくぼた（以降、G.くぼた）、でしたよね。

明輪 そうです。G.くぼたでの 2 年目に出したのです。ですから 2011 年になりますね。25 号の半抽象を出して 1 年目に奨励賞を頂戴し、抜けられなくなりました。(笑)私は政治的だったり、宗教的だったり、偏った主張の会には出たくありません。東京展はニュートラルだと思います。

田代 私も明輪さんや石塚さんと同じ 2011 年に初出品です。それまで実は自分の絵を描いていませんでした。絵の教室はやっていたんですけどね。生徒さんも上達し、

ただの写生画では済まなくなり、生徒さんが私の作品を見たいという要望があって自分の絵作りをするようになりました。そこで区民展に出した時に東京展出品者の友達に誘われて G.くぼたに出したのです。区民展は息子の大好きなセミの脱皮を描いた絵を出しました。最初の東京展にはイグアナです。銀座ワンの織田さんに「東京展は東京都美術館に戻るから大作の方がいいよ。」と勧められ、翌年 2012 年は 100 号を出品しました。

石塚 私は中学校の美術教員です。さすがに仕事が激務なので、自分の絵はなかなか描けません。東京展に出す前は、数年に 1 枚描いてごまかすような日々。でも 40 歳になった頃、これではまずいと思い、一念発起して東京展に出したのが皆さんと同じく 2011 年の G.くぼたでした。10 号一点ではありましたが、私も奨励賞をもらうことが出来て嬉しかったですね。

田所 皆様、有難うございます。東京展との最初の関わりが知れてとても興味深いです。では、初めの頃に東京展を見た時の感想を教えてください。

加賀美 私はもう長く出しています。深尾庄介先生、薄井正彦先生、村岡千穂さん、齋藤鐵心さん、青柳芳夫さんと、委員長が変わって、その都度東京展のカラーも変わって来たと感じましたし、その時々で構成される運営委員の皆さんのキャラクターもとても展覧会に反映していたと思います。深尾先生や薄井先生には大変有意義な指導をしていただきました。薄井先生の大学の教室や喫茶ルノアールに集まって勉強しました。油野誠一先生には「これからは絵本が伸びる時代。だから頑張りなさい。」とハッパをかけられましたし、丸山あつしさんにもお世話になりました。先生方は紙の効果について教えて下さったり、絵本の資料もたくさん見せて下さったりして、絵本の部屋の栄養になりました。指導を受けたメンバーで研究会活動を続け、『絵本の部屋』の核となっています。油野先生はピュアな精神の持ち主で厳しい先生でしたが、今でも『絵本の部屋』を見つめて下さっているようで良い意味での緊張感があるんですよ。

田所 とても良い話ですね。絵本の部屋の歴史も感じます。さて、明輪さんはいかがでしょう？

明輪 G.くぼたで初めて皆さんの作品を見たわけですが、抽象が多くて驚きました。でも、抽象って上手いか下手か、素人には分からないじゃないですか。それはある意味で良いな、と思いましたね。

田代 そうですね、私も具象なので、抽象の多さは感じました。あと、東京展は美術館だと大きさも作品配置もまちまちで、そこが自由でいいなと思いました。額も制限がありません。内容もとても自由ですよ。しばらくしてコミックアート部門が導入されました。それは画期的だったし、東京展だからこそ出来る素晴らしいジャンルだと思います。

石塚 昔は抽象が全盛だった時代もありましたが、最近



は具象も復権してむしろ美術の主流でもあります。そうした意味でも、東京展に具象が増えて来たのも自然だし、バランスが取れていると思います。立体作品も増えてきて、ジャンルのバランスも良くなりましたね。

加賀美 そうそう、東京展には『他人の作品を認め合う自由さ』があるんですよ。

石塚 先生がいて”右へ做え”ではなく、作家の主体性があるからそこに多様性もあり、優れた作品から自由に吸収も出来ます。それは良い点ですが、悪い点として、”独り善がり”になってしまうこともありますよね。それは自制していかないといけません。

田所 有難うございます。皆さんの発言から、”自ら進んで学んでいく姿勢”が大事なのだと教えられました。

〈賞選考について〉

田所 では次のテーマです。『賞』について語って下さい。よく「東京展の理念から言って、賞はあってはならないのだ。」という言説があります。しかしここで押さえていただきたいのは、確かに東京展の初期には賞はありませんでしたが、アンデパンダンを主張したのは針生一郎さん一派であり、中村正義さんらは、特にアンデパンダンを標榜していなかった、という事実です。

加賀美 絵本の部屋は当初 220 人くらいの出品者がいて、人数のわりにいただける賞が少なかったきらいがあります。やはり賞をもらおうと頑張るんですね。当初は製本自体が雑だったり、内容も今ひとつだったりという出品者も多かったのですが、ちゃんとしたレベルの出展者には賞をあげたかった。そこでマーベラス賞というものを作って毎年 10 人くらいに出していました。ただ最終日に表彰するだけでしたが、皆さんとても喜んでいました。コロナの関係で、ここ数年は出していない。実はコロナのおかげか皆さん制作に集中したようで、絵本のレベルが上がったんですよ。そうした意味でコロナ以降は東京展賞、優秀賞、奨励賞を出しています。

田所 そうですよ、私も賞をもらう人数は出品者の数から計算して、同じ比率にした方が良いという考えです。分母を考えて賞の数を決めるということ。

加賀美 東京展はどうしても絵画の委員が多くて、賞も絵画に偏りがちです。去年は写真部門で一人も賞は取りませんでした。

田所 【その他】というジャンルでも良い仕事をしている作家はいるのに、そこでも賞無しでした。

明輪 セレクションの時に絵画だけでも賞を決めて時間の余裕を作ったら？

加賀美 そうよね、セレクションの時に落ち着いて審査してもいいのでは、と感じます。

明輪 長年出品している人に奨励賞を安易にあげるのもどうかと思っています。お客さんから「どうしてこの作品が？」とよく言われます。功労賞でもいいのでは



ないですか？

田所 確かに努力賞や奨励賞という名前より分かりやすいかもしれませんね。

明輪 あと、最近の賞は選考の理念とどうしても合わない局面があり、公平であっても不透明な部分が残っているように感じてしまいます。私は賞選考委員を設置してもらいたい。もちろんより公平を期すために輪番制が良いでしょう。

田所 私は東京展に関わって約半分の 25 年。委員も長いので、その時その時の賞選考を経験して来ました。決して改悪を目指して変えてきたのではありません。昔は一部の人が選考していました。それから委員が話し合って決める段階に入ったのですが、どうしても声の大きい人の意見に左右される傾向があったりして、純粹に投票のみになりました。しかし一般出品者や会員から「賞を取るのには委員だけじゃないか。委員会でよろしくやっているのではないか？」との批判が毎回毎回あり、そこでせめて会員の皆さんに一票を投じてもらおうと、今の形になったのです。会員であることのメリットの一つを作ったのです。それがなかなか浸透していないのが、努力不足ではありますが・・・。

明輪 いずれにしても見識のある人が選んで、「この作品だったら賞をもらって当然だね。」として欲しいです。あと、賞の名前に付随して、『岡本太郎賞』とか『中村正義賞』なんかもあれば素敵だと思います。

田所 先達の名前にあやかることで、その賞をもらった作家は気持ちが引き締まるでしょうね。

田代 私は賞に関してはやはりあった方が良いと思います。賞がなくてもいい、という考え方は一方で理解出来るものの、賞は自信に繋がるので、あった方が良いです。明輪さんや石塚さんは初出品で受賞されたのですが、私が賞をいただいたのは 5 年目で初めてでした。もし東京展に合わないようなら、やめようかと思っていました。そんな折り、賞を戴けて東京展の皆さんから認めてもらえたと感じました。賞が私を東京展に繋ぎ止めてくれて、なおかつ東京展賞も受賞して、おかげさまで自信になりました。

田所 それはタイミングも良かったですね！ 1 年遅かっ

たら田代さんは抜けてしまわれたかもしれない……。 (笑)
東京展にとって大きな損失になるところでした。

田代 あと、東京展は批評や講評が無いので、自分の作品の客観的な評価は賞で判断するしかありません。そこも重要なところですよ。



田代りえ子氏

明輪 賞は成長を促すよね。

田代 そうです。賞をもらって「もっと頑張ろう！」となります。

石塚 私も賞は当然あったほうがいいと思います。もう皆さんが言われたことと同じです。私は自己評価が元々低かったのが、賞を頂戴して、「あ、これでいいんだ。」となりました。有り難いことです。

田所 分かりました。賞は作家を励まし、成長させる。でも今の選び方には少し問題があって、時間をかける方向でちゃんと選んでいく、ということに収斂するのではないか、とお話を聞いて認識を深めました。

〈東京展独自の企画展について〉

田所 次のテーマは【企画展】です。皆さん今までご覧になって来た中で印象的だった企画を教えてください。

加賀美 中村正義展が良かったと思います。東京展創始者だった中村正義さんの作品には緊張感があり、迫力も満点。お客さんの反応も良かったですね。正義さんの意志を継ぎたいと改めて思いました。

明輪 2019年の藤井勉展が良かったと思います。東京展関係で無い作家を紹介したのも良かったです。あと、企画展とはちょっと違いますが、2020年にWebで開催したネット上での東京展も皆さんに覚えておいて欲しい大切な歴史です。

田所 コロナによるパンデミックで世界中が混乱する中、東京展も当然美術館で出来なかったわけですが、WEB東京展が救ってくれましたよね。あの時明輪さんが中心となって動いて下さいました。あらためて感謝したいです。

田代 私は毎年のように開催して来た会員企画展が良かったと思います。山崎さん・山口さんの二人展も印象に残ってますし、今回私も参加させていただいて、この企画の意義をとっても感じました。

石塚 私も藤井勉展が良かったですね。自分も具象を描いているので勉強になりました。あと、2022年の東京展EYESは見応えがありましたね。

田所 有難うございます。それでは今後どのような企画をしたら良いでしょうか？

明輪 AI作品を並べるといのが面白いかな。

田所 時代性もありますし、AIはクリエイティブでは嫌

われていたり、著作権の問題で認められにくい面があって敬遠されていますが、それを逆手に取って展示するのもアリですね。そう言えば、絵本の企画、というのは特にここ最近手薄なように感じますが、加賀美さん、何かアイデアはないですか？

加賀美 毎年東京展の『絵本の部屋』に集中することにより、出品者の制作の意欲が高まり、出品者数もキープできていると思っています。

明輪 絵本は今の状態がベストであって、特に企画などは必要ないかもしれませんね。あと、東京展EYESも良かったけど、会に関係ない作家を呼ぶのはいいよね。

田代 展覧会として変化を生むし、お客さんも全体で見てジャッジするので、東京展としてメリットはあると思います。単にレベルの問題ではなく、広がりという点で……。

田所 有難うございます。企画部門は東京展のウリでもあるので、今後もビビッドな企画を打ち出していきたいですね。皆さんのお知恵を拝借して進めて参りましょう。

〈絵本の部屋を語る〉

田所 さて、次のテーマは【絵本の部屋】についてです。こうした場で相互に意見交換するのは意味あることだと思ってあえて設定しました。

田代 そもそも団体展で絵本のまとまった展示は東京展にしかないと思います。大変有意義な部門です。私の友人も特に子供連れだったりする場合に絵本の部屋に入り浸ります。もちろん感想もとても良好ですね。

加賀美 展示業者の川端さんも「絵本の部屋が好きなんだよね。」と言ってくれます。絵画部門の、難しそうに見える先生方も絵本の部屋では相手を崩してニコリされますね。世界にも類例が無い展示空間だと自負しています。ただ、ギャラリートークの時に絵本は抜かされ、待機していた『絵本の部屋』のメンバーはショックを受けました。

明輪 あれは残念でしたね。絵本は絵本で別の時間帯にやれば良かったのかな……？

田所 運営側のミスで、頭が回りませんでした。そこに関してはここで皆さんに陳謝したいと思います。すみませんでした。そういうきめ細かい対応はしていないかな。大反省です。

石塚 「絵本の部屋は騒がしいと批判される。」と言われることも多いのですが、美術館ってそんなに声出してはいけないもの



石塚亨氏

でしょうか？叫んだりするのはもちろん論外ですが、作品の前で語り合ったりするのは自然であり、鑑賞のあり方として良いのではないかと、思っています。

田所 そうですね。ちょっと美術館側も神経質なところがあり、杓子定規に取り締まらないで欲しいと願っています。まあお仕事なので監視員さんも大変かと思いますが・・・。

石塚 あと、絵本作家は、他の、例えば絵画であったり写真であったりと、他の部門に出したりはしないんでしょうか？

加賀美 『絵本の部屋』では、一般出品者の絵本はテーブルに置く。会員は壁に絵を掛け、その前の彫塑台に作品を展示しています。この展示形式を気に入って下さっている為か、今の所、他の部屋に作品を出品したいと考えている人はあまりいないと思います。

田所 絵本以外の会員さんは柔軟に他の部屋に出していますね。それこそ絵本の部屋にもお邪魔？しています。絵本の会員さんも自由に考えて下さっても良いな、と普段逆が多いので、心苦しく思ったりします。

加賀美 そのように思っていないと思います。

田所 そうですか・・・。もう少しお互いの交流が深まっても良いかもしれませんね。他に今後の絵本の部屋の理想像みたいなものってありますか？

加賀美 私達は今のままで充分出来ていると思います。ただ運営委員のことですが、私の他に誰かに頼みたいと思っていますが、ずっと委員を続けることの負担も大きいです。なので、一年交代で絵本の委員を出す、という方式を認めて欲しいと思っています。

田所 そうですか。そうすると、委員会出席する人も増えて絵本の方々の認識も深まり、なおかつ他ジャンルとの交流も促進され理想かもかもしれません。私としては単なるオブザーバーとして出ただけだけでなく、何らか意見を開陳していただきたくも思います。そして絵本の部屋のことを代弁して、なおかつ東京展本体に対して建設的な意見も出していただけたらいいな、と思っております。すぐには無理ですから、ゆくゆくは、ということで考えて欲しいと思います。でも加賀美さんからこの具体策を出していただけたのはとても収穫です。座談会の意味がこれだけでもあったと言って良いでしょう。



明輪勇作氏

〈東京展、今後の展望〉

田所 さて最終的に第3のテーマ【東京展の未来】について話していただきたく思います。

明輪 先般も委員の皆さんに発信したように、東京展は”八百万の神（やおよろずのかみ）”的精神を持っている会だと思います。この精神を継承したいですね。

田所 それはどのような意味ですか？

明輪 まずもって一つの主義や主張に偏らないことが大事です。多神教的世界観は他の価値観を包摂します。それは日本的であり、東京展のアドバンテージでもあります。そうした意味でも東京展は多様性を標榜すべきだし、多くのジャンルがあって然りです。成功している団体はみな多くの部門を有していますね。日展、二科展、国画会、アンデパンダン展などもそうです。

田所 なるほど、ウイングを常に広げていくことは東京展の生命線でもありますね。

石塚 具体的なことになっちゃいますが、キャプションにせめて素材を表記したらどうでしょう？見る人は「この質感ってこういう素材だから出来るのか。」と驚きがあり、鑑賞者を喜ばせると思うのです。



加賀美裕子氏

田所 東京展はヒエラルキーを作る”研究会”ではなく、主体的な作家が鑑賞者と直につながることを旨とした”発表会”です。そこで作品はまず鑑賞者に開かれていなくてはなりません。端的に言うとサービスですね。事務局の仕事は増えますが善処したいと思います。

明輪 そういう意味では、第1室のあり方も問題があるのでは、と思います。最近の第1室は単なる通路になってしまっているのを感じます。ちょっと地味かな。足を止めるお客さんが少ない。第1室はそもそもイントロとしてお客さんの心を掴まなければなりません。さらに力のある作品を置きたいですね。

田所 少し補足説明させて下さい。5年前、6年前までは、第1室は抽象・具象、いろいろありました。しかし全室いろいろあるせいで、内部からも外部からも「見にくい。」と批判されたのです。そこで、せめて抽象と具象とを分けて展示するようになったのですね。そこにはお客さんに対する意識の萌芽があります。そして昨年は全体として展示は良いと評価されました。明輪さんの感想はここ数年、第1室が抽象のみ、となっている状況を指しているのだと思います。どうしても抽象画は一般の人には分かりづらいですからね。展示に関しては何をやっても問題は出てきます。だからこそいろいろやっていいし、毎回違えても良いと思います。

田代 時代性を考えると、インスタレーションなんかを持って来ても面白いですね。

明輪 そうそう、若い人の作品を投入するアイデアもア

リですね。

加賀美 毎年絵画が第1室を担当していますが、少し変えてもいいと思いますね。

田所 私の個人的案では、毎年キュレーターを替えて、責任持って全体を物語化していくと良いと思っています。もちろんあくまで出品者の誰かが担当するのですが、例えば第1室はおとなしめなモノクローム作品から始まって次第にサイズを大きく見せていく。そして色彩的に派手な作品を展開させつつスタイルの変化を計算して最後まで飽きることなく鑑賞させる、などの年もあっていいかな、と思う次第です。毎年見に来る人は混乱するかもしれませんが、そこに合わせても仕方がないと思います。

石塚 第1室に各セクションの受賞作品を一点、あるいは数点ずつ置く、というのはどうですか？つまり各セクションのダイジェスト版。それなら展覧会の概要をまず知らしめることになり、レベルも一定で、鑑賞者も期待を持って進んでいくことが出来ます。優秀な作品を全部そこに持って来るのは良くありませんが、展示としては他団体にはなかなか出来ないやり方でしょう。

田所 それはとっても面白いアイデアですね！ もうすぐにもでも採用したい誘惑に駆られます。

石塚 絵本やコミックアートの受賞作も数点、第1室に置けば、導入としては完璧でしょう。

皆 なるほど！それは面白いですね！！

明輪 若い人の好みも反映させたいです。そして若い人に嫌われない雰囲気にしていかなければなりません。時代遅れになってしまっは先細りです。

田所 今の東京展の盛り上がりからして、私はあと5年は充分慣性の法則でやっていけると確信しています。だから10年先から心配すべきなのかな。と。出来れば100年続いて欲しい東京展。その布石も打っていきたい。足元見なきやダメだよ、と言われそうですが、最近知り合いの作家さんに聞いたら20年で自分達が作った団体展を解散したと言っていました。無くなる時はあつけないです。そして東京展が存続するだけでなく、もっと価値ある団体展になって欲しいと思います。東京展が成長して欲しい。そこには今日集まって下さった皆様のアイデアであつたり行動であつたりが支えていくのだと思うのです。より多くの会員が力を発揮して、心から楽しんで会を盛り上げていきたいと思います。この座談会を契機として、我々も、そしてこれを読む他の方々も、少しでも前向きに東京展のことを考えていただけたらと、切に願います。

今日は皆さん、貴重なご意見を有難うございました。一緒に希望の光を大きくしていきましょう！